

怠惰屋の弟子入り

国木田独歩

青空文庫

アフリカしう
 亞弗利加洲にアルゼリヤといふ國がある、凡そ世界中此國
くくに
 の人ほど怠惰者はないので、それといふのも畢竟は熱帶
ひと なまけもの ひつきやう ねつたい
 地方のことゆえ檸檬や、橙の花咲き亂れて其得ならぬ香四方に
ちほう れもん だい／＼はなさ そのえ かほりよも
 立ちこめ、これに觸れる人は自から睡眠を催ふすほどの、だらり
た ふ ひと みづ ねむり もよ
 とした心地の好い土地柄の故でもあらう。
こゝち よ とちがら せい
 處が此アルゼリヤ國の中でブリダアといふ市府の人は分ても怠
ところこの こく うち
 惰ることが好き、道樂をして日を送ることが好きといふ次第で
まけ す だうらく ひ おく
 ある。

フランスじん
 佛蘭西人が未だアルゼリヤを犯さない數年前に此ブリダアの
ま ま おか すねんぜん
 市にラクダルといふ人が住んで居たが、これは又大した豪物
まち ひと す む たい えらぶつ

で、ブリダアの人々から『怠惰屋』といふ綽名を取つて居た漢、
をとこくらべ み さすが なまけや
この漢と比べて見ると流石のブリダアの市人も餘程の勤勉の民
まちびと よほど きんべん たみ
と言はんければならない、何にしるラクダルの豪い證據は『怠
な えら しようこ
惰屋』といふ一個の屋號を作つて了つたのでも了解る、綉工
まげや ひとつ やがう つく しま わか ぬひはくや
とか珈琲屋とか、香料問屋とか、それ／＼所の名物の商
かうひいや かうれうとひや めいぶつ
業がある中に、ラクダルは怠惰屋で立つて居たのである。
やうばい なまけや た
抑も此男は父の死だ後、市街外れに在る小さな莊園を
そ このをとこ ちち しん あと まちはず あ ちひ しやうゑん
承嗣だので、此莊園こそ怠惰屋の店とも謂つべく、其白い
うけつひ このしやうゑん なまけや みせ いひ そのしろ
壁は年古て崩れ落ち、蔦葛思ふがまゝに這纏ふた門は年
かべ としふり くづ お つかづおも はひまと もん ねんぢゆ
中開つ放しで閉たことなく、無花果や芭蕉が苔むす泉のほとり
うあけ ぼな とぢ いちじく ばせう こけ いづみ
に生茂つて居るのである。此莊園でラクダルはゴロリと轉がつ
おひしげ あ こ ころ

たまゝ身動もろくに爲ず、手足をダラリ伸したまゝ一言も口を開かず、たゞ茫乎と日がな一日、年から年中、時を送つて居るのである。

赤蟻は彼のモヂヤくした髯の中を草場かと心得て駈け廻るといふ行體。腹が空て來ると、手を伸して手の届く處に實て居る無花果か芭蕉の實を振つて食ふ、若し起上つて振らなければならぬなら飢餓で死だかも知れないが、幸にして一人では食ひきれぬ程の實が房々と實つて居るので其憂もなく、熟過た實がぼてくと地に落ちて蟻の餌となり、小鳥の群は枝から枝を飛び廻つて思ひのまゝ木實を啄んでも叱り手がなといふ次第であつた。

先づ斯ういふ風な處からラクダルの怠惰屋は國內一般の評
 判ものとなり、人々は何時この漢を仙人の一人にし
 て了ひ、女は此庄園の傍を通る時など被面衣の下でコソく
 と噂してゆく、男の中には脱帽して通るものすらあつた。
 けれど小供こそ眞の審判官で、小供の眼にはたゞ變物
 の一人としか見えない。黴物にして慰さむに丁度可い男と
 しか見えない。であるから學校の歸途には大勢が其崩れ
 落ちた壁に這いのぼつてワイくと騒ぐ、手を拍つやら、囃すやら、
 甚だしきは蜜柑の皮を投げつけなどして揶揄うのである。けれど
 も何の効果もない。怠惰屋は決して起き上らない、たゞ一度、草
 の臥床の中から間の抜けた聲を張上げて

『見て居ろ！ 起きてゆくから！』

と怒鳴つたことがある。然し遂に起きあがらなかつた。

ところあるひ

處が或日のこと、やはり學校の歸途に庄園の壁の上でラ

クダルを掬擲つて居た少年の中に、

何と思つたか甚く感心して

しまじぶん是非怠惰屋にならうと決心した兒が一人あつた。つ

まりラクダルに全然歸依して了つたのである。大急ぎで家に

歸へり、父に向つて最早學校には行きたくない、何卒怠惰屋に

して呉ると嘆願に及んだ。

『怠惰屋に？ お前が？』

と親父さん開いた口が塞がらない。暫時く我兒の顔を見つめて居

たが『それはお前、本氣か。』

たが『それはお前、本氣か。』

『本氣だよ親父さん！ラクダルさんのやうに私も怠惰屋になるのだ。』

親父といふは煙管の旋盤細工を業として居る者で、鶏の鳴く時から日の晩るまで旋盤の前を動いたことのない程の、ブリダア市では珍らしい稼人であるから、兒童の言ふ處を承知する筈もない。

『馬鹿を言ふな！お前は乃父のやうに旋盤細工を商業にするか、それとも運が可くばお寺の書役にでもなるのだ。怠惰屋なぞになられて堪るものか、學校へ行くのが嫌なら櫻の木皮を剥すが可いか、サア如何だ此大たわけめ！』

櫻の皮を剥されては大變と、兒童は早速親父の言ふ通りに

なつて其翌日そのよくじつから平常いつもの如くごと學校がくかうへ行く風ふうで家うちを出でた。けれども決けつして學校がくかうには行いかない。

市街まちの中程なかほどに大きな市場いちばがある、兒童こどもは其處そこへ出かけて、山のやうに貨物くわもつの積つんである中なかにふんぞり返かへつて人々ひと／＼の立騒たちさわぐのを見みて居いる。金絲ぬひはくの綉うはぎをした上衣ひきらめを日に煌ゆかして行く大買おほあき人んどもあれば、重おもさうな荷物しよつを脊負にんそくてゆく人ひと足あしもある、香料かうれうの妙たへなる薰かほりが折をりくく生温なまぬくい風かぜにつれて鼻はなを打うつ、兒童こどもは極ごく樂くへでも行いつた氣きになつて、茫然ぼんやりと日の晚くれるまで斯かうして居あた。次つぎの日ひも次つぎの日ひも、此兒このこの影かげは學校がくかうに見みえない。四五日しごにちも經たつと此事このことが忽たちまち親父おやぢの耳みみに入はつた。親父おやぢは眞赤まつかになつて怒おこつた、店みせにあるだけの櫻さくらの木きの皮かわを剥むかせ（な脱力）けれ

ば承知しょうちしないしないと力味りきんで見たみたが、さて一向いつかうに效果きくめがない。少年こども

は平氣へいけいで

『わたしわたしは是非ぜひ怠惰屋なまげやになるのだ、是非ぜひなるのだ』と言張いはつて聽きかな

い。櫻さくらの皮かわを剥むくどころか、家いへの隅すみの方ほうへすつこんで了しまつて茫ぼんや

然りして居ゐる。

色々いろくと折檻せつかんもして見たみたが無駄むだなので親父おやぢも持餘もてあまし、遂つひに

お寺様てらさまと相談さうだんした結極あげくが斯かういふ親子おやこの問答もんだふになつた。

『お前まへが若もし怠惰屋なまげやの第一だいいつとう等とうにならうと眞實ほんとに思おもふならラクダ

ルさんとこの處ところへ連つれて行いかう。じゃが先まづラクダルさんしけんに試験しけんをして

貰もらはなければならぬ、其上そのうへでお前なまげやに怠惰屋なまげやになるだけほんたうの眞實りの力ちから

倆きりやうがあるきまと定あれば、更あらためてお前あを彼あの人の弟子でしにして貰もらふ、

如何だ、これは？」と親父は眞面目に言つた。

『是非さうして下さい。』と兒は二つ返事。

其處で其翌日は愈々《いよく》怠惰屋の弟子入と、親父は息子の衣装を作らへ頭も奇麗に刈てやつて、ラクダルの莊園へと出かけて行つた。

門は例の通り開つ放しだから敲く世話も入らず、二人はずん／＼と内へ入つて見たが草木が縦横に茂つて居るのでラクダルの居場所も一寸知れなかつた。彼方此方と捜す中、漸このことので大きな無花果の樹蔭に臥こんで居るのを見つけ出し、親父は恭々しく近寄つて丁寧にお辭儀をして言ふのには

『實は今日お願があつてお邪魔に出ました。これは手前の愚息で

御座います、是非貴様のお弟子になりたいたいと本人の望ですから
 連て参りましたが、一つ試験をして見て下さいませんか。其上
 で若し物になりさうだツたら何卒怠惰屋の弟子といふことに願ひ
 たいものです。さうなると私の方でも出来るだけのお禮は致しま
 す積りで……』

ラクダルは無言のまゝ手眞似で其處へ坐らした。親父は當

前に坐る、愚息はゴロリ臥ころんで足を踏伸す、この臥轉び

方が第一上出来であつた。三人は其まゝ一言も發しない。

恰度日盛で太陽は燦然と煌き、暑は暑し、園の中は森と

して静まり返つて居る。たゞ折々聞るものは豌豆の莢が熱い

日に弾けて豆の飛ぶ音か、草間の泉の私語やうな音、それでな

くば食あきひ飽とりた鳥しげみが繁なか茂ものうの中で物疎はゞたきさうに羽搏はおとをする羽音ばかりばかり。
つえすぎ熟過いちじくた無花果いちじくがぼたりと落ちる。

其そのうち中腹はらが空すいて來きたと見みえてラクダルは面倒めんだう臭くささうに手のぼを伸のぼして無花果いちじくを採とつて口くちに入いれた。然しかし少年こどもは見向みむきもしないし手ても伸のぼさないばかりか、木實このみが身體からだの傍そばに落おちてすら頭あたまもあげなかつた。ラクダルは此この様さまをぢろり横目よこめで見みたが、黙だまつて居ゐた。

斯かういふ風ふうで一時間じかんたち二時間じかん経たつた。氣きの毒どく千せん萬ばんなのは親お父やちさんで、退たい屈くつでく堪たまらない。しかしこれも我わがこ兒こゆゑと感かん念んしたか如何どうだか知しらんが辛棒そのして其すわまゝ坐すわつて居ゐた。身動みうごもせず熟じつとして兩足くんを組すわで坐すわつて居ゐると、園そのを吹渡ふきわたる生温なまぬくい風かぜと、半分焦こげた芭蕉まつきいろの實じゆくや眞黄色だいに熟かほりした柑橙かほりの香かほりにあてられ

て、身みも融とけゆくばかりになつて來きたのである。

やゝ暫しばらくすると大きな無花果みの實みが少年こどもの頬ほの上に落おちた。見みるからして堇すみれの色いろつやゝかに蜜みつのやうな香かほりがして如何いかにも甘味うまさうである。少年こどもがこれこどもを口くちに入いれるのは指ゆび一いつぽんうご本動ほんどうかすほどのことこともない。然しかし左ひだりも疲つかれ果はてて居ある様さまで身動みうごもしない、無花果いちじくは頬ほの上うへにのつたまゝである。

暫しばらくは其そのまゝで居あるが遂つひに辛棒しんぼうしきれなくなり、少年こどもは晒ながし目めに父ちちを見て、鈍にぶい聲こゑで

『父とつさん——父とつさん、これを口くちへ入れて下くださいよう。』

これを聞きくや否いなや、ラクダラクダルは手てに持もつて居ある無花果いちじくを力任ちからまかせに投なげて怩然ふつぜんと親父おやぢの方かたに振ふり向むき

『此兒このこを私わたしの弟子でしにするといふのですか貴様あなたは？ 途方とほうもないこ
と、此兒このこが私わたしの師し匠やうだ、私わたしが此兒このこに習ならいたい位くらゐだ！』
そして卒いきなり然おきあ起あ上あがつて少年こどもの前に跪ひざまづき頭あたまを大地だいちに着つけて
『謹あがたてまつで崇なまけめ奉かみさまる、怠なまけ惰かみさまの神かみさま様！』

青空文庫情報

底本：『国木田独歩全集 第四卷』学習研究社

1966（昭和41）年2月10日発行

入力：小林徹

校正：柳沢成雄

1999年2月9日公開

2004年5月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

怠惰屋の弟子入り

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>